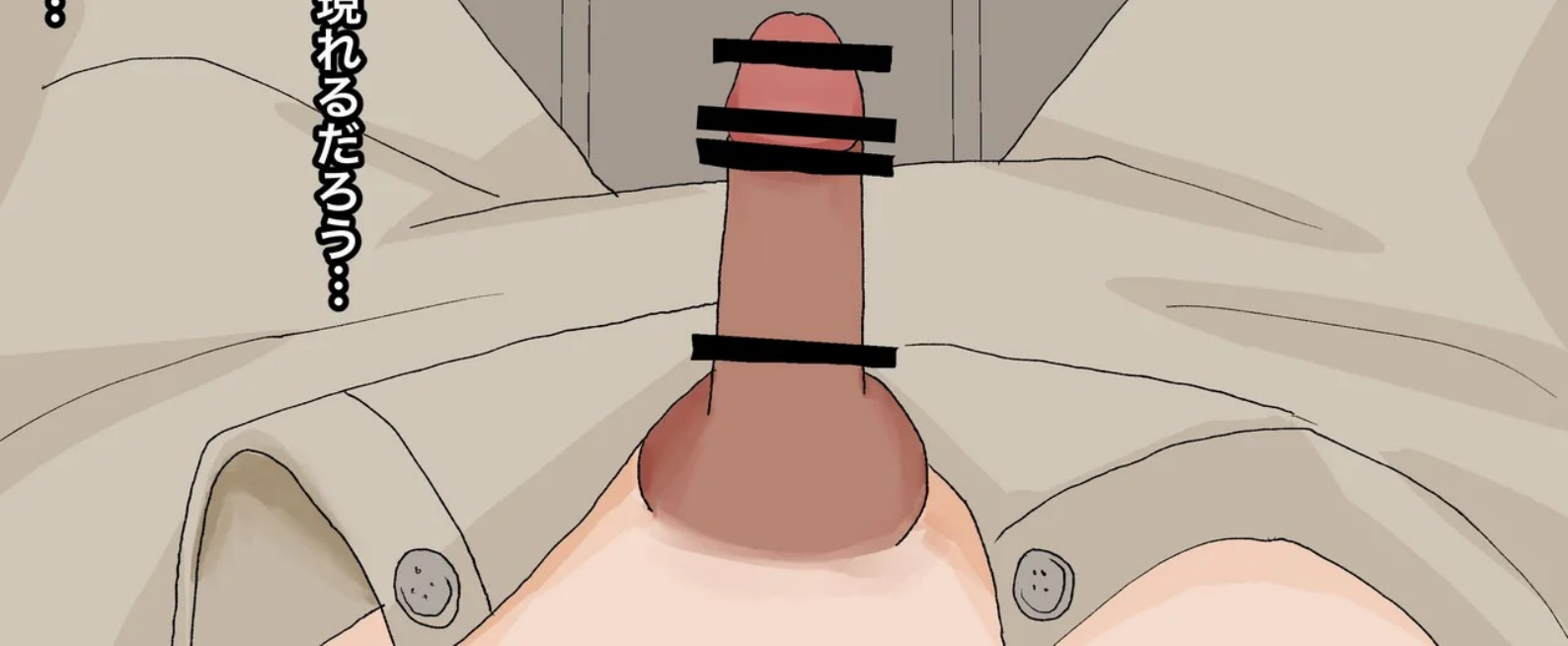




僕の名前は布村幸太 一人暮らしの大学生だ
今日は休日だから彼女とゆっくりお家デートの予定さ
お家デートって何をするかって？そりゃえっちなことさ！
今日は責められたいドMな気分だから
こうしてふざけた格好で彼女を待っているんだ
まずは靴脱ぎたての足でこれを踏んでほしい！

さっきももうすぐで着くって連絡あったからまもなくその扉が開き彼女が現れるだろう…
実は足コキはまだ一回もやってもらったことがない…
やって欲しいとは前々から思っていたんだけど
やっぱりちよっとお願いするのが恥ずかしい
だから自然に足コキされるような誘導をする
昼間っから丸出してギンギンの俺を見れば呆れて踏んづけてくるだろう…

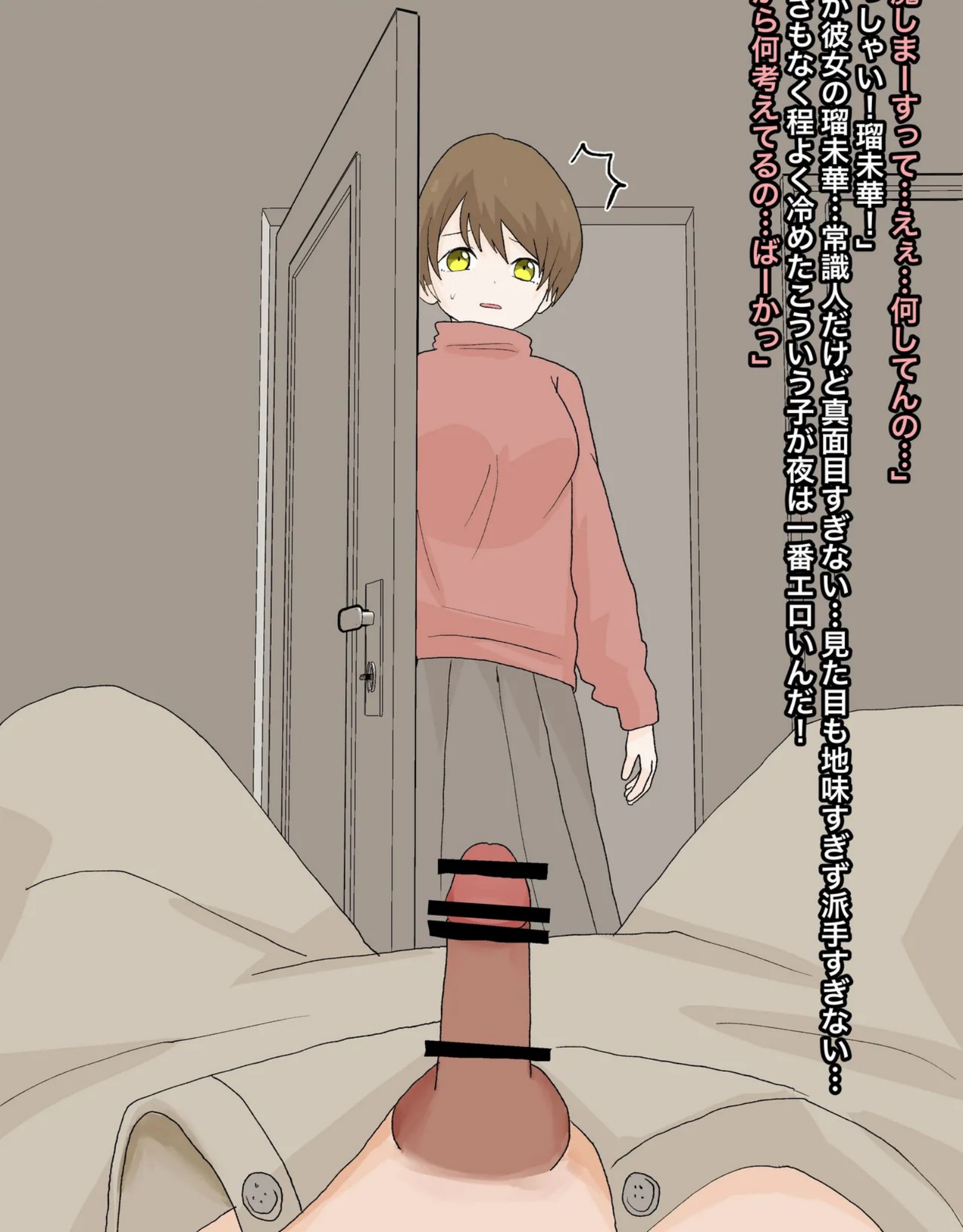


「お邪魔しまーすって…ええ…何してんの…」

「いらっしやい！瑠未華！」

この子が彼女の瑠未華…常識人だけど真面目すぎない…見た目も地味すぎず派手すぎない…あざとさも程よく冷めたこついう子が夜は一番エロいんだ！

「昼間から何考えてるの…ばーかっ」



「はあはあ！黒ソックスだ！やっぱり靴下は黒だよなあ！」

「はっ？何言ってるの？」

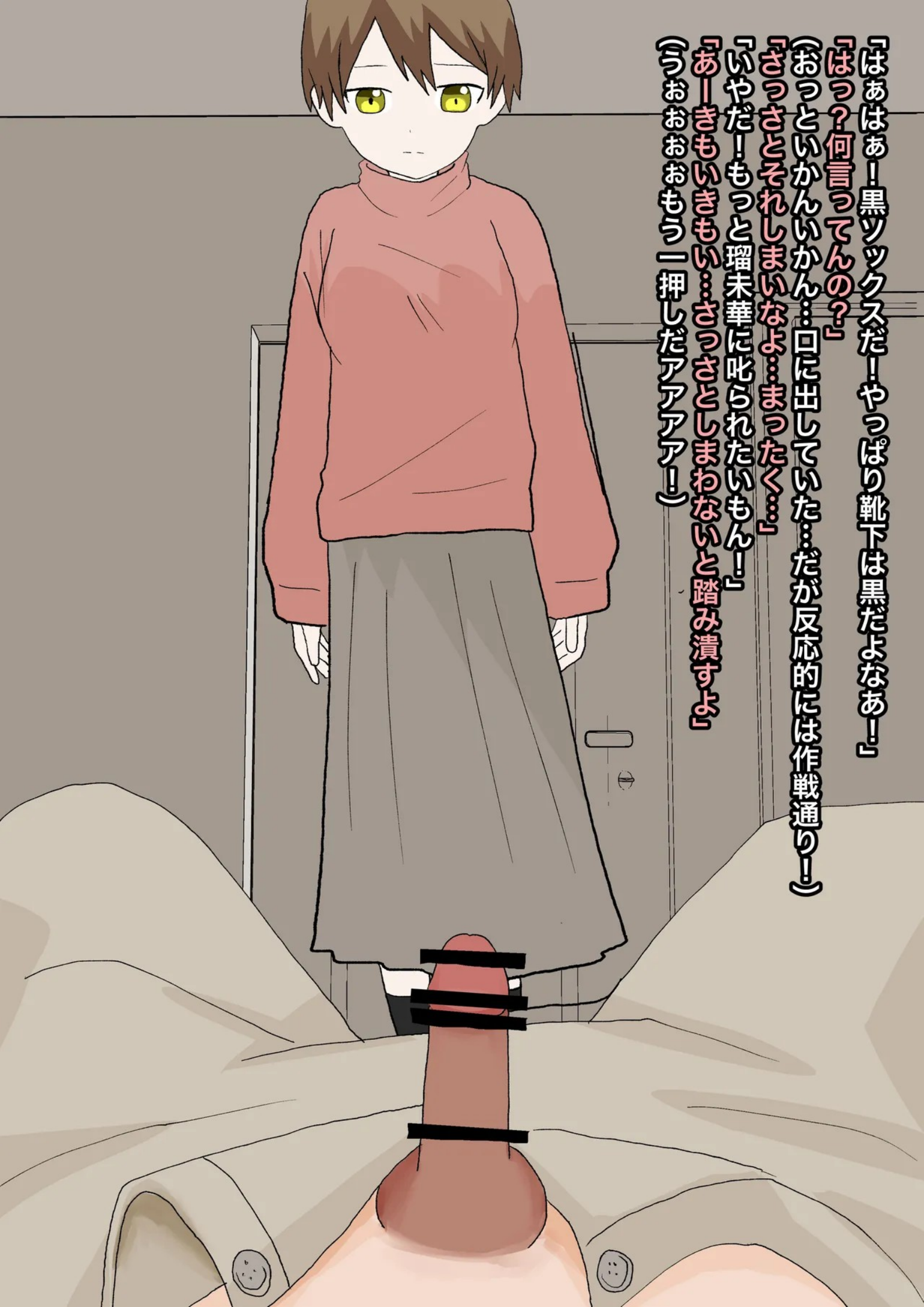
「おっといかんいかん…口に出していた…だが反応的には作戦通り！」

「さっさとそれしまいなよ…まったく…」

「いやだ！もつと瑠末華に叱られたいもん！」

「あーきもいきもい…さっさとしまわないと踏み潰すよ」

「うおおおもうー押しだアアアア！」



「早くしまえって言うてんの!」

(きたああああ! 作戦通り! 馬鹿だなあ〜うちの彼女!)

「…あつあれ? これって普通嫌がって足振り払ったり観念してパンツ履くところじゃ…」
「はあはあ! もっともっと! 足コキ最高!」

「嘘でしょ!?! キモイキモイツ! 踏まれて喜んでるの!?! 変態!」

「えっへへへ…初めて足コキした気持ち教えてください!」

「いやひたすらにキモイ! 足だよ? 踏まれるって屈辱的な事でしょ?

意味わかんない!」

「いかん…このままでは踏むのをやめてしまっ!」

ぐいっ

「そんな事言っつなよー性癖なんだからしょうがないだろ！」
世の中には踏まれる事でしか興奮できない人もいるんだぞ！」
「そ…それは…」
「失礼だと思わないのかね！」
「す…すみません…」

うちの彼女アホすぎないか？そんなところも大好きだ！
しかし踏まれながら謝られるのシチュールすぎる…
「では続行してくれ！」



「えっと…なんか勢いで
踏んじやつたけど…痛くない？」
「フウフウ…気持ちいいよ！」
「亀頭以外も触ってくれると嬉しい」
「わ…分かった…」

「あーあ、」

「あーあ、」

「ん…ん…ん…」
「あぁっーそのなぞる感じいい！
ぞわぞわするー！」
「そ…そっ…」

「っっ」
「ビクッ」

「あぁっ付け根押し込まれてる！
金玉も押されるの気持ちいいー！」
「…何がいいのか全然理解できない…」

「ぐにゅ」
「ビクッ」

「はあ…はあ…もうイキそうだ……足コキ最高!」

「い…イキそうなの…? 冗談だよな…?」

「本当だとも! 最後は電気あんまみたいに振動するように動かしてくれ!」

「…ごう?」

「ああああ! 上手い! 微弱ながらも絶妙な小刻み! ブルブル震えて気持ちいい!」

「やっぱキモイ…でもこれ楽だね…足動かすだけでいいなら生理の時とか助かるかも…」

「溜末華…そろそろマジでイキそう…」

「もう…いつもは手とか口とか使わせてくる上になかなかイかないのに

…なんか…イライラしてきた…」

「あああ! なんか強くなってる! 溜末華!」

「うるさい…これがいいんでしょう? さっさとイけば?」

「おおお! サディスティックな溜末華さいこおおお!」

エ
ク
ヰ



「はあはあ…最後の罵倒は最高だったよ…素質あるんじゃないの?」
「素質って…今までで一番最悪の気分なんだけど…」
「でもなんだかんだ最後までしてくれる瑠末華って本当に最高の彼女だよ!」



「…まあ…途中でやめられるって男にとって何より辛い事らしいし…」
「瑠末華…瑠末華最高おおおおお!」
「ちよつと! 足にちんこ擦り付けるな!」

びゅっ
びゅっ

「瑠末華！自分で汚したものは自分で綺麗にするよ！」
「ちよつと…お腹壊しても知らないからね…」
「はあはあ！おいしいよ！」
「気持ち悪い…」

れろっ

れろっ
ンロレロッ

へろへろ



「はあはあ…ただの布でも
瑠未華の足を纏ってるだけで別物だな!」
「知らないよ…綺麗になったんなら
もう舐めるのやめてくれる?」
「えゝもっと舐めてたい…そうだ!」



舐める汚れが無くなったんならまた出せばいいんだ！
フウウ〜俺って天才！

「ちよつと馬鹿！なんでまた！？」
「瑠末華の足とセックスだああ！」
「本当に私の彼氏馬鹿すぎるよ…」

「瑠末華！馬鹿馬鹿言っていないでもう少し強く挟んでくれないか？」
「なんでそんな事…ほらっこれでいいの？」
「おおふっ！ナイス締め付け！」



「おおふっでっ出る…」
「なんで出したばっかなのにまた出してんのよ…ムカつく…」
「瑠未華とセックスよすぎる…」
特にドSでもない彼女の足無理やり借りてエッチするの最高！」

「何がセックスよ！」
勝手に足持って腰振って…
そんなのオナニーじゃん！」
「なんだろ？ 拗ねてんの？」
…じゃあ夜は普通に
セックスしような！」

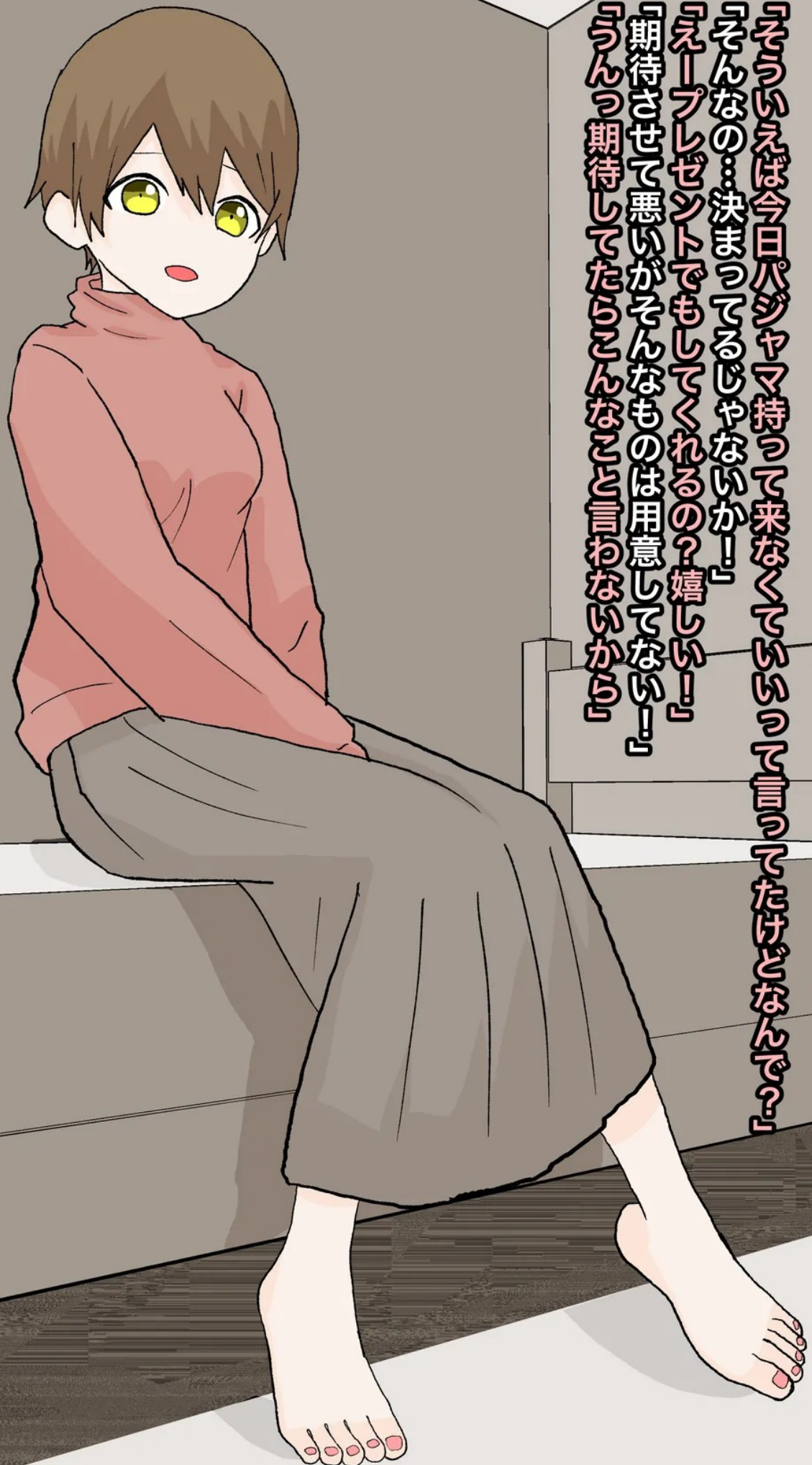
「いや…拗ねて…ならっ…」



「あー最高！いい眺めだ！なんも見えないけど！」
瑠末華のいい匂いと俺の臭い精子の匂い混ざり合って興奮がおさまらない！
なあ瑠末華！汚れてないところも舐めていい？」
「…もう好きにしたら？」
「はあはあ！ていうか瑠末華の足顔にフィットしすぎじゃね？
これ運命だよな！？」
「なんでこんな馬鹿と付き合っただらう…！」



「そっういえば今日パジャマ持つて来なくていいって言うってたけどなんで？」
「そんなの…決まってるじゃないか！」
「えープレゼントでもしてくれるの？嬉しい！」
「期待させて悪いがそんなものは用意してない！」
「うんっ期待してたらこんなこと言わないから」

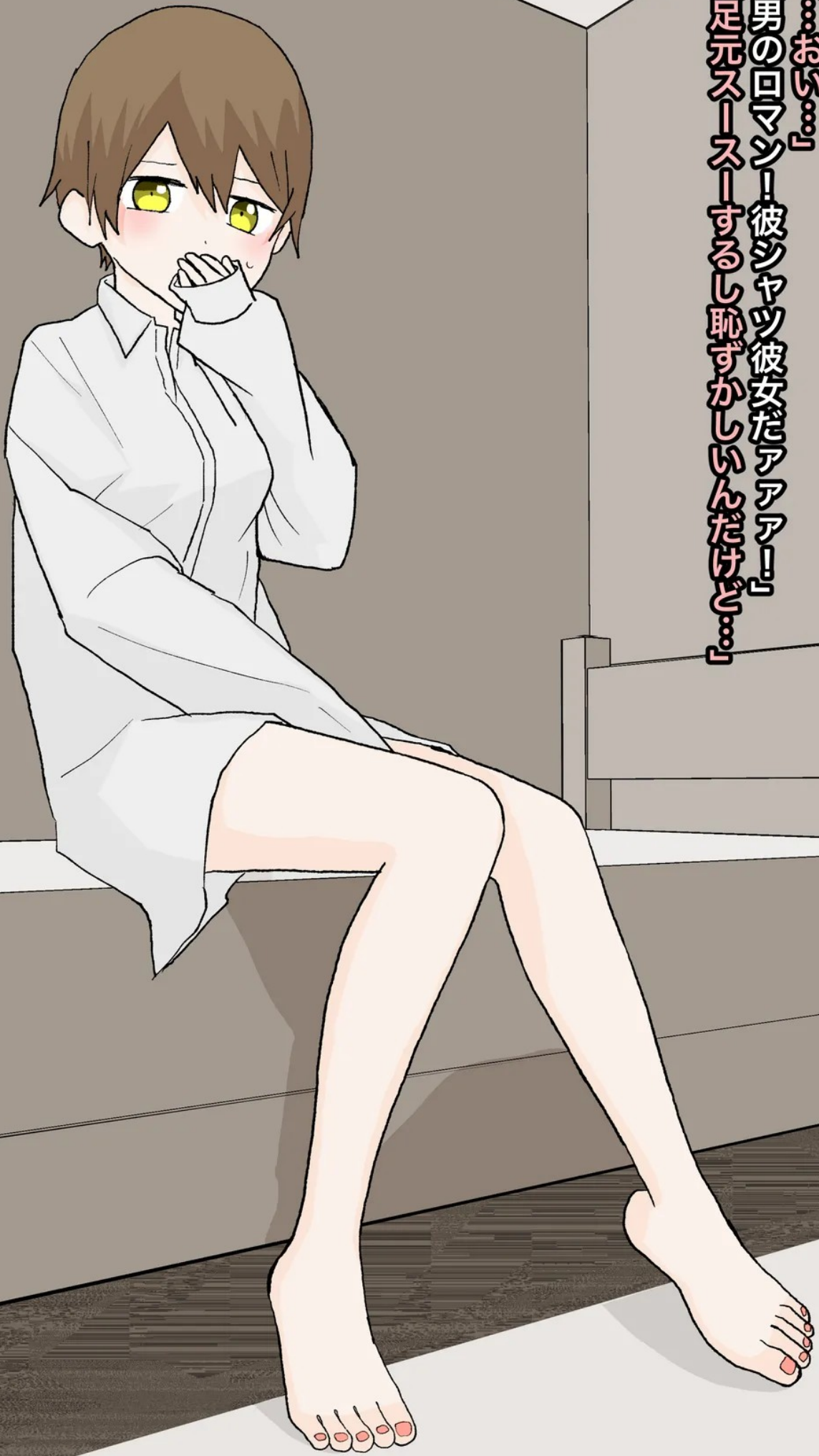


「プレゼントは用意してないがこんなものを用意した！さあ着替えてくれ！」
「えっ！なにになに？やっぱり何かくれるの？」

「…おい…」

「男のロマン！彼シャツ彼女だアアア！」

「足元スースーするし恥ずかしいんだけど…」



「サイズ感、手の仕草！表情！百点満点だ！計算せずにそうなるんだから恐ろしい子！」

「ごういうのはもっと女の子らしい子にさせるものでしょ…私なんかにごんな格好させて楽しい？」

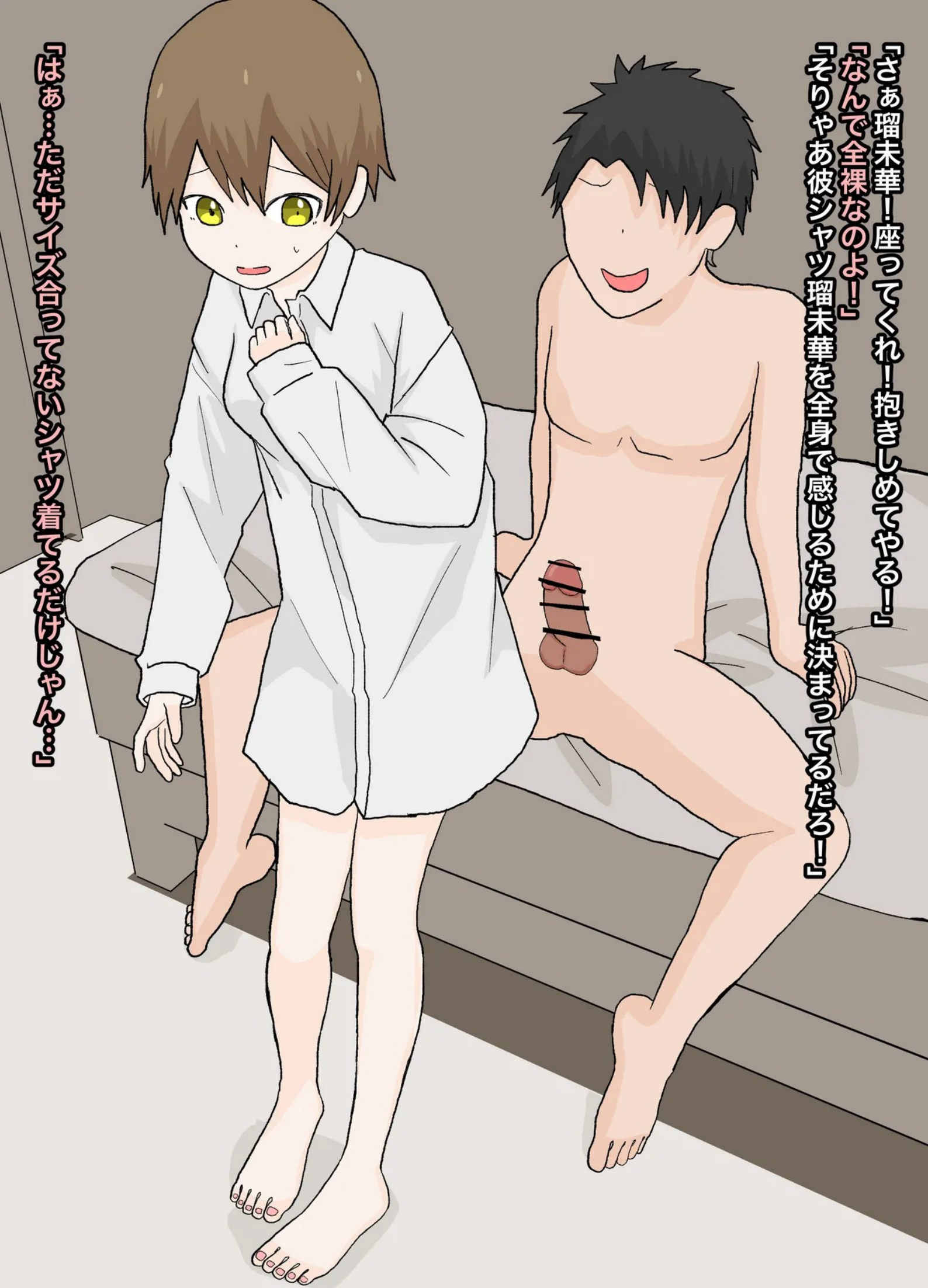
「おおふっ喋れば喋るほど性癖に刺さるの天才か！？」

「ばっかじゃないの…」

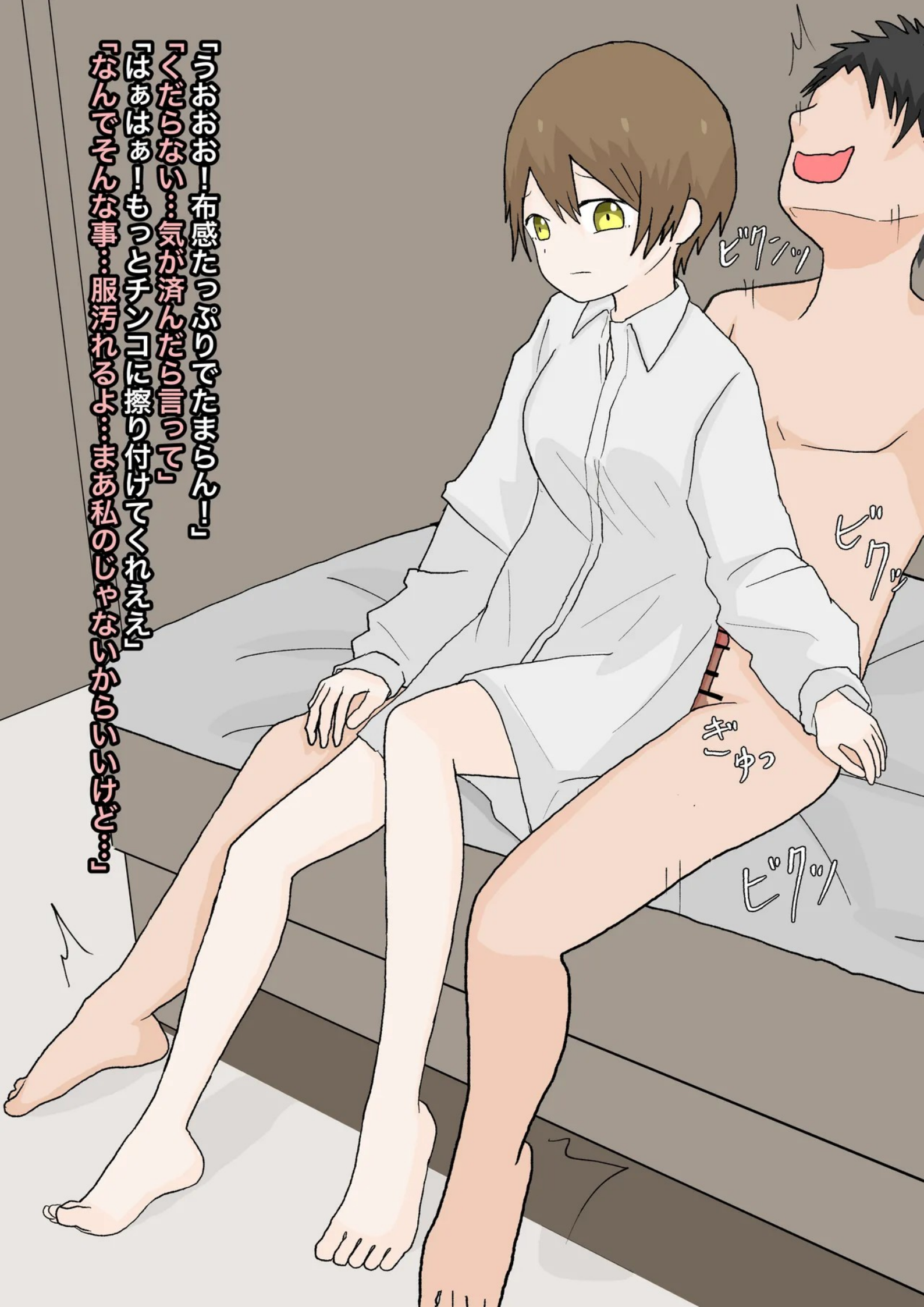
「フオオオオオオオオ！」

「さあ瑠未華！座ってくれ！抱きしめてやる！」
「なんで全裸なのよ！」
「そりゃあ彼シャツ瑠未華を全身で感じるために決まってるだろ！」

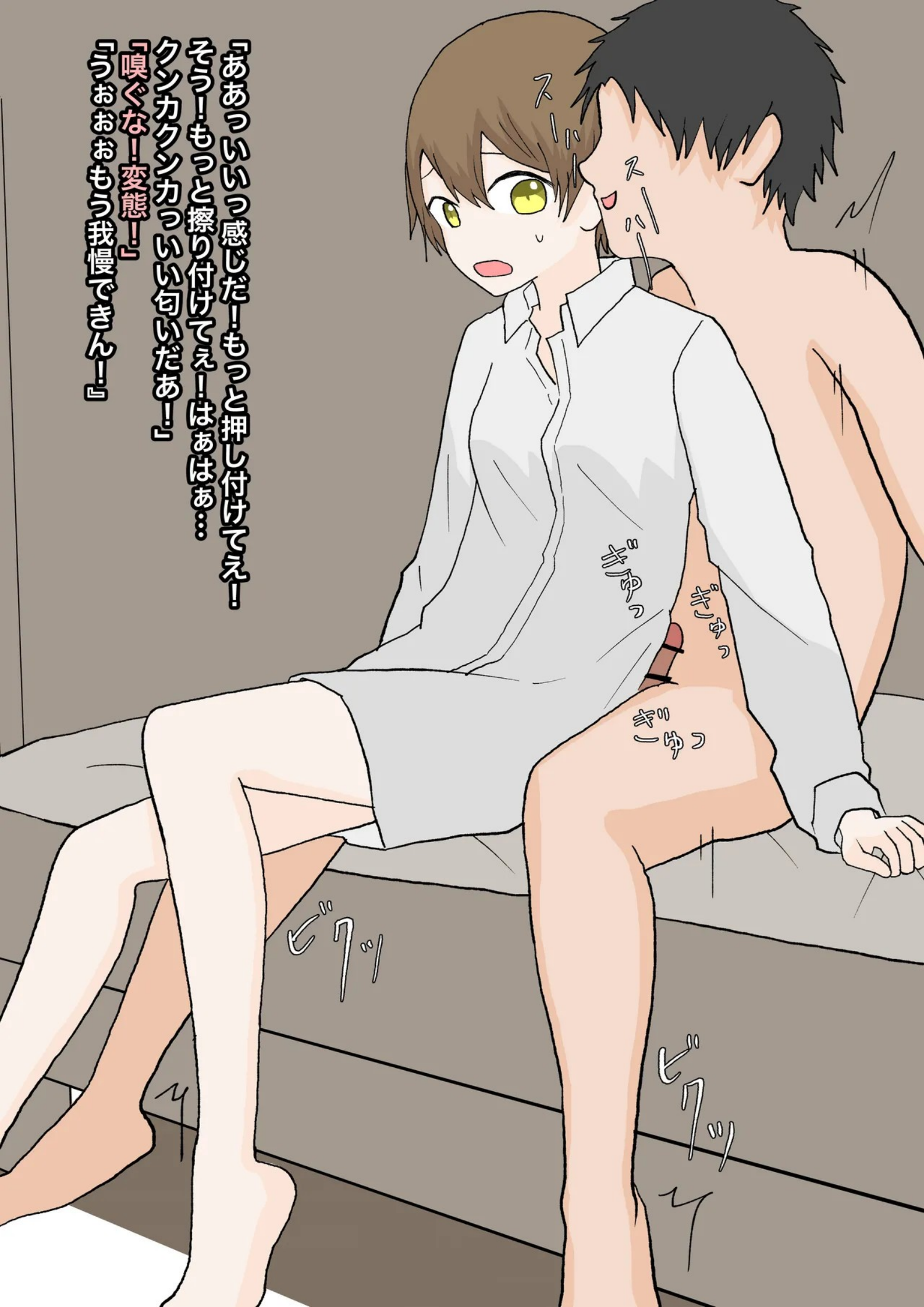
「はあ…ただサイズ合っていないシャツ着てるだけじゃん…」



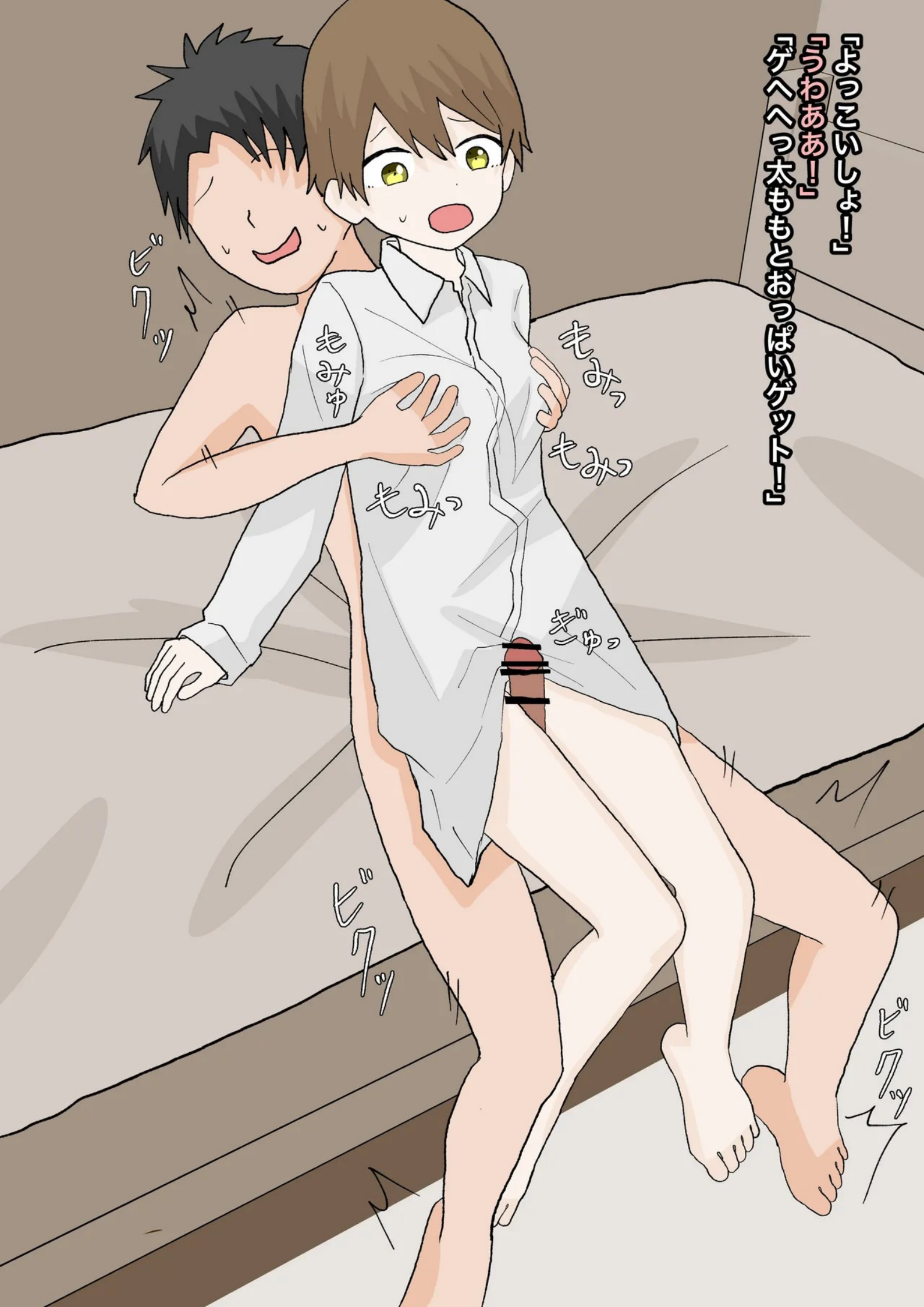
「うおおお！布感たつぷりでたまらん！」
「くだらない…気が済んだら言うて」
「はあはあ！もっとチン」に擦り付けてくれええ」
「なんでそんな事…服汚れるよ…まあ私のじゃないからいいけど…」



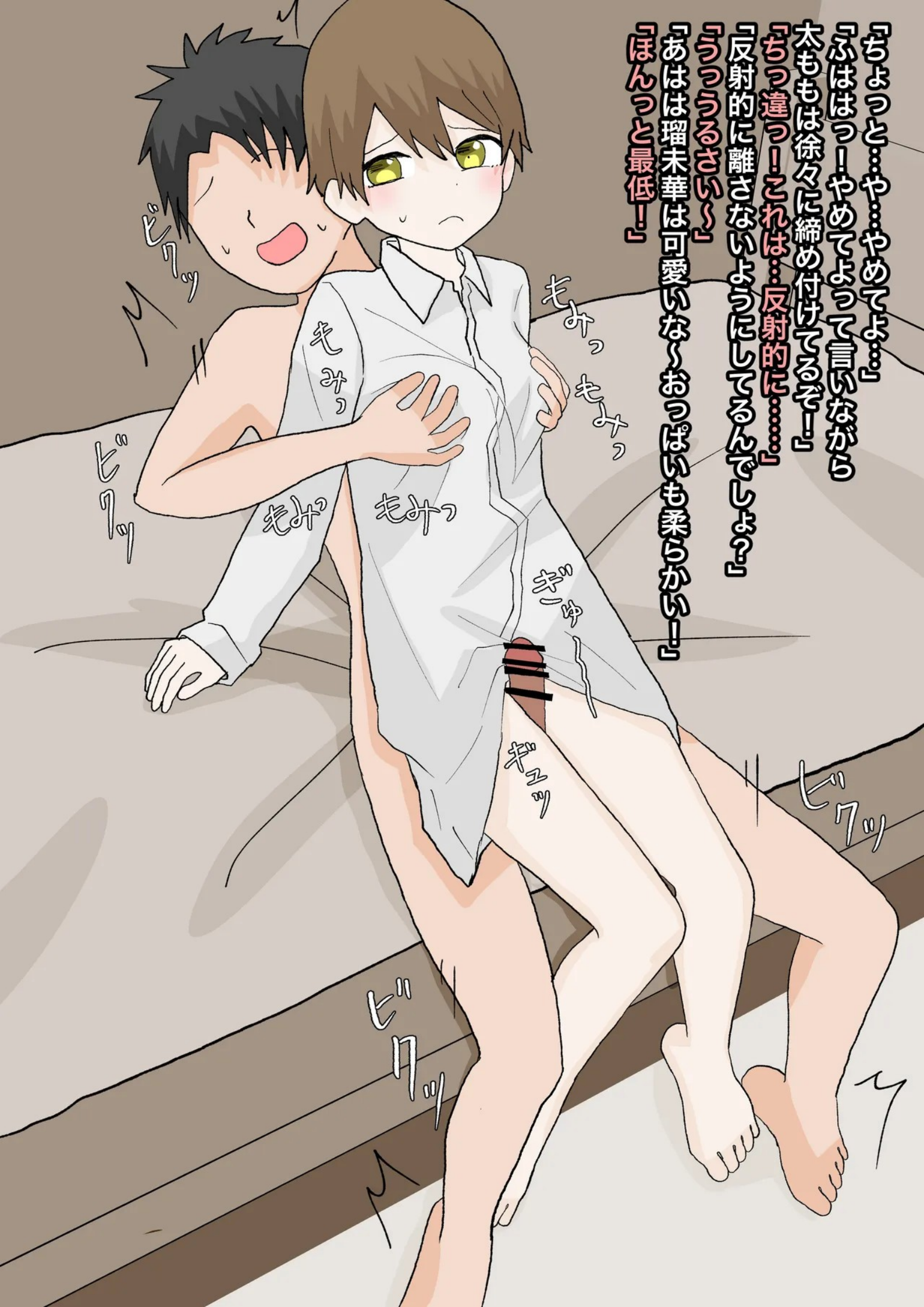
「あぁっいいいっ感じだ！もっと押し付けてえ！
そう！もっと擦り付けてえ！はぁはぁ…
クンカクンカっいい匂いだあ！」
「嗅ぐな！変態！」
「うおおおもう我慢できん！」



「あーっうーっ」
「うわあー!」
「ゲヘヘっ大ももとおっぱいげっ」



「ちょっと…や…やめてよ…」
「ふははっーやめてよって言いながら
太ももは徐々に締め付けてるぞー!」
「ちっ違っ!これは…**反射的に**………」
「**反射的に**離さないようにしてるんでしょ?」
「うっうるさい」
「あはは溜末華は可愛いなくおっぱいも柔らかいー!」
「ほんっと最低!」





「...」
「ふんっ...」



「ふんっ!」
「ゴフッ!」



「離っ!」
「ふんっ...」

「踏まれるのも好きなんだしぐうぐうのも好きなんですしよー!」
「シンツモゴゴ!」(顔騎だとお!普段責められるだけの瑠未華がなんて積極的な!)
「ふう…ふう…(わ…私は何てことを…」
でもこいつが悪いんだ…このまま髪掴んで動かしてやる…」



(瑠未華が頭掴んでゆっさゆっさしてる!)
動きに微妙に戸惑いがあるのが可愛いなあ〜
「はあはあ…鼻とか口とか…擦れて…変な感じ…」

「よし舌入れたる！」
「ちよつつ馬鹿っ今は…」
「えへへへっもうグチュグチュだねえ瑠末華」

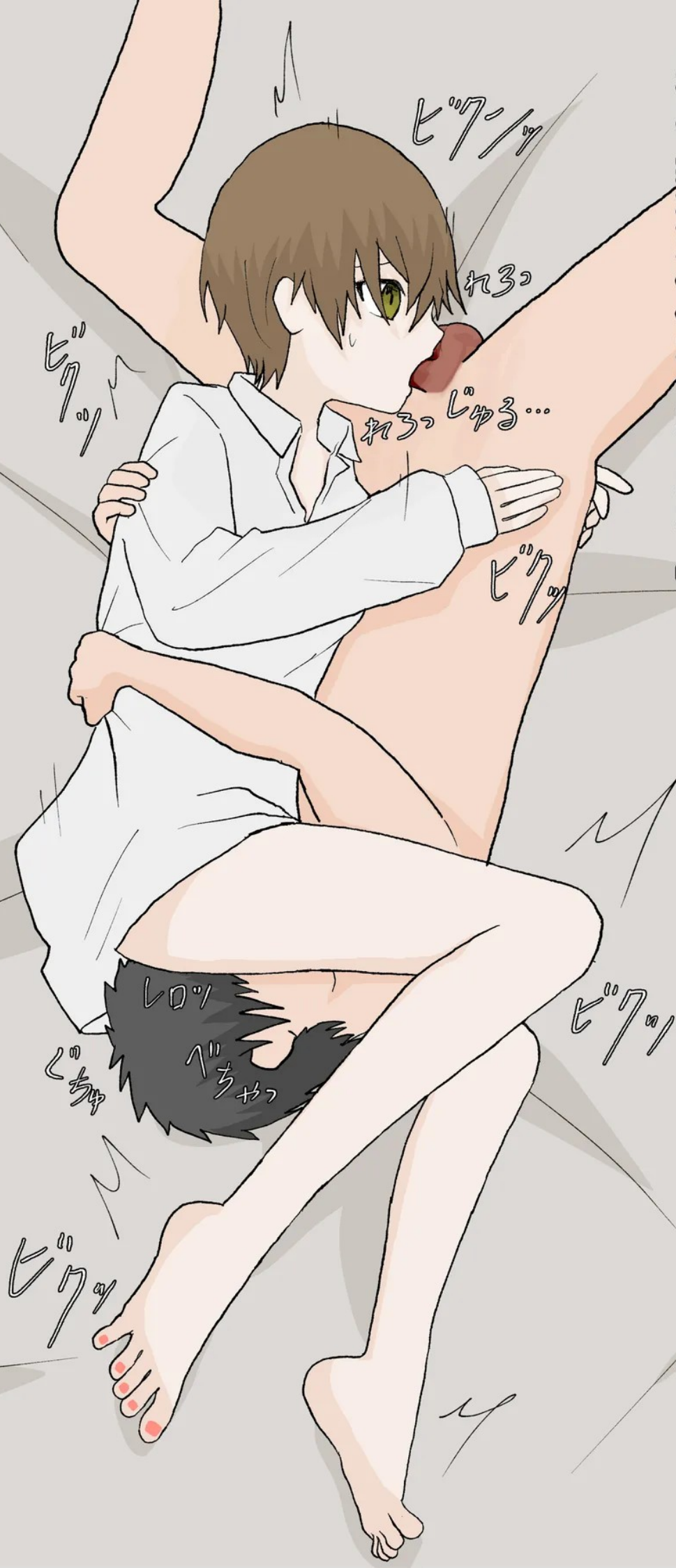
「もう…なんでこう逆転されちゃうかなあ…」
「瑠末華は本当弱いなあ〜よじっトドメの舌高速回転だああ！」
「きやつ急に早く!? 嘘っ!? ちよつとまってよおお！」



「いやっダメえええっんん！」
「いった！ぐふふ人の顔に跨って気持ちよくなるとは
なんとけしからん娘だ！もっと舐めてやる！」
「やっやめてって！ごめんっ謝るからあ！」
「謝はるだけじゃ許さん！」
「じゃっじゃああんたのも舐めるからあ！」
「よし！和平成立だああ！」



「んっんっ」
くっくっくっ最高〜！口でおまんこ可愛がりながら胴体には
シャツが密着して股間は口でご奉仕されて…
これ以上贅沢な体位ないだろおお！」



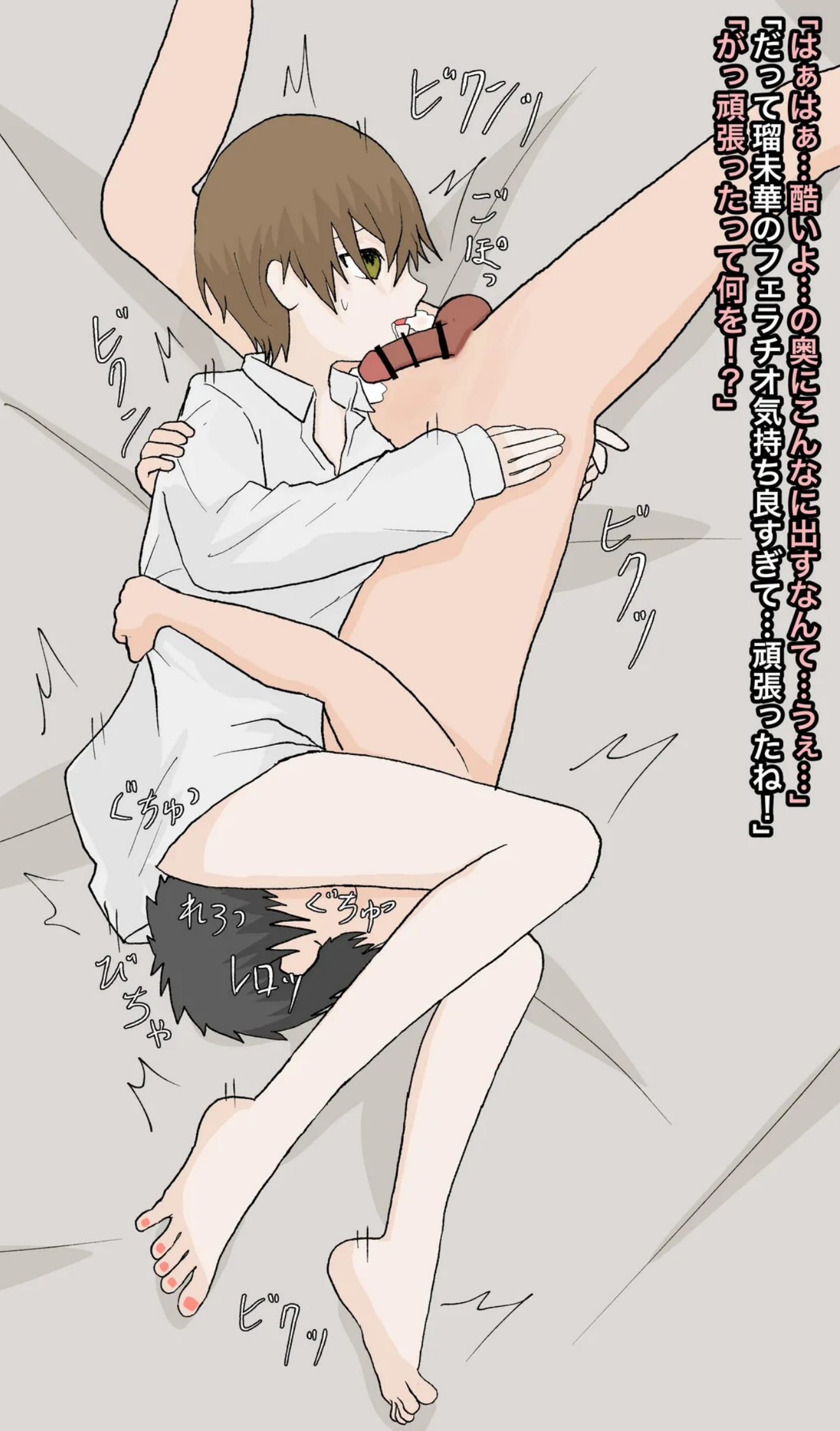
「んんっ！(また容赦なく弱いところ連続で舐めてくる…
私だけ気持ちよくさせられて悔しい…負けないもん…)」
「ひゃっチン」喉奥まで行ってないからやばらじわは…」

「こんなのすぐ出ちゃうよっアアッグうっう！」
 「ん——っっ！(ちよっとっ今はっ！喉奥だからダメええっ)
 (アアアアっ出してゐる！溜末華の喉奥に精子だしちゃったあ！)
 (苦しいー本当あり得ないんだけどっ！)」

「うおっ太ももの締め付けが強くっ！
てかこんな綺麗な太もものに挟まれながら出せるなんて幸せ過ぎるだろ！」
「ちよっといっまで出るのよっおええっ！」

「はあはあ…酷いよ…の奥にこんなに出すなんて…うえ…」
「だって瑠未華のフェラチオ気持ち良すぎて…頑張ったね！」
「がっ頑張ったって何を!？」

「へへへ俺の高速クンニでビクビクしながらも頑張ってるじゃあなかったよー！」
「…うぎ…もうツつこむ気にもならないわ…」
「俺はまだまだ突つ込む気満々だよーおち○んちんを！」
「うるさい…しばらく黙ってて…」



「じゃあそろそろ挿れるよ!」
「ふう……ふう……ダメっ……」
「ゆっくり挿れるからね! 痛かったら言ってね! まあこんだけグチュグチュなら大丈夫か!」
「ダメって言ってるじゃん……耳聞こえてないの?」

「聞こえてるよ! 瑠末華の心の声が!」
「早く挿れて欲しいって言うてる!」
「いっ……言っ……ないもん……!」

「あああっんっんッッ！」
「ああっ気持ちいいねっ瑠未華っ！」
「ちよっとなっ待ってっ奥に当たりすぎっ！」

ビクッ

ビクッ

はっんっ

ビクッ

はっんっ

はっちんっ

「瑠未華は奥が好きなんだな！ガンガンしてるよー！」
「無理っもう無理っ！」
「ちよっとなっ瑠未華可愛すぎるすぎるっ俺もやるやるー！」

「アアツイクー瑠未華——ツツツツツ」
「ぎもいから…名前呼ぶな！」

はあ…

はあ…

「はあはあ！瑠未華が可愛いすぎたからこんなに出ちゃった…」

「で…出過ぎじゃ…いつもより…」

「またその服装でやらせてね！」

「…いらい…けど…」

ヒュ
ヒュ
ヒュ
ヒュ
ヒュ

ヒュ
ヒュ
ヒュ

ヒュ
ヒュ
ヒュ

ある日お家デートに1時間遅刻してきた瑠未華ちゃん

「俺はすげえ怒ってるよ！一時間も彼氏待たせて！」

「ごめんって…」

「ほら！怒りすぎてチンコもこんなに大きくなっちゃったよ！」

「意味不明だから…」

実を言うと俺は全く怒ってない！

なぜなら瑠未華の遅刻理由が容易に想像できるからだ！

普段絶対足を出さない溜末華が

パーカー一枚という攻めまくった服装をしている

きつと本当にこれで行くのかと

何度も着替え直して遅れたに違いない！

「溜未華ちゃん…手」キでこれ鎮めてくれたら許してあげる!」
「…さっさと出しなさいよ…」

「それにしてもパーカー
似合ってるね、萌袖も可愛い!」
「そ…そう?」
「そうだ!袖にちんちん入れている?」
「は?何言ってるの?そんな汚い事」
「汚いだとお?もう怒った!」
「無理やり入れてやる!」



「えへへー入っちゃった〜！ちよつとパーカーの生地摩擦が刺激強かったけど無理やり入れちゃったもんねー！」
「最低っ！もう…あんたが喜ぶと思ってこの服装にしたのに…」

「えー！？喜んでるよう？このチン」の硬さが何よりの証拠だよ！」

「そうじゃなくて…もうパーカーとセックスしたら？私なんていないんじゃない？」

「そんな事ないよ！俺はパーカーが好きなんじゃなくてパーカー着てる

溜末華が好きなんだ！」

「…口ばっかり…」

しゅっ

しゅるっ



「瑠未華！金玉も軽く握ってくれないか？」
「このまま握りつぶしてあげようか？」
「ははは！握りつぶしたらもう
セックスできないぞ〜？」
「いいよ…別に…」
「あつ瑠未華！また奥まで行っちゃった！」
「何が奥よ…くだらない…」
「ぬぬぬ！」

ぎゅっ

ぎゅっ

ぐわっ

ぐわっ

「さっきからなんだ！その態度はー！むぎー！」
「ちよっと！チンコで顎クイしないでよ！」

「えー？でもこの前顎クイに憧れるって言ってなかったっけ？」
「こんな最低な顎クイあるか！」
「とにかく生意気な瑠未華にはわからせてやらないとな！」
「わからせるって…何を…」



「よしっぴやあまずはちんちん全体を瑠末華のよだれで濡らして...」
「シググッ? んんっっ!」
「今回は奥まで入れなくていいよ。舌で全体を舐め回してくれ!」

「ぐぐっれるる...」
「はははっなんだかんだ舐めてくれる瑠末華やっぱり最高だ!」



「滑りが良くなったらチン」を顔全体に塗り込むように擦り付ける！」
「ふざけっ！本当っ意味がわかんない！」
「ああ〜ッ瑠未華のほっぺすべすべだなあ〜」
「人の顔をツモノみたいに扱って…酷いっ！」



「やばい出そう！瑠未華！右目閉じて！」
「ちよっちよっ」と！」

「あああああつつ出しちゃった〜！
瑠末華の頭無理やり掴んでほっぺで擦り付けて出しちゃった〜！
離してっ！頭おかしいんじゃないの？」

「よし次はどこに擦り付けようかな〜？
「ちよっ…」回落ち着いて…」



「髪の毛だな!! サラサラな髪の毛に精子トリートメントしてあげる!!」
「もう勝手にして...」
「あつてもごめん出したばっかだからあんまり出ないかも!」
「謝るところおかしいから!」



「はううー!出るううー!」
「もう最悪の気分…ベタベタするし臭いし…」
「よーし…はあはあっ次は…っ」と
「まだ私の顔に擦り付ける気なの!?!」



「ごごはどうだ？耳「キ」新しい！」

「変なところ擦り付けないで！」

「おおふっ耳「キ」いいじゃん！」

複雑な形だけどそれが無造作に「リ「リ」と刺激して気持ちいい！」

「なんでもありかよ…ううっ」

「ねえっこのまま耳に出していい？」

「はっ？やめてよ…せめて顔にかけてっ」

「そんなに顔にかけてほしかったのか！」

「そうとは言っていないっ！もうっ馬鹿すぎっ！」



「お望み通りの顔射だ〜!」
「望んでない…こんなの望んでないよ…」
「いやっそんなこと言って喜んでるの知ってるぞ! その証拠に後半
頭掴んでないのにチン」から離れなかったからね」
「…うんうんうんうん!」

ビュルッ

ビュルッ
ビュルッ
ビュルッ

「精子まみれの瑠末華可愛いよ!」
「…うんうんうん…」

「る…瑠未華!?!今なんて!?!」

「別れるって言ったの!」

「顔面に精子塗りたくる彼氏とかおぞましいわ」

「そんなく捨てないでくれよ〜!」

「さっさと消えてくれない?」

「10秒以内に出てかないと金玉蹴り上げるから」

「出てく…って…ここ俺の家…」

「こっ細かい事はいから」

「とりあえず私の前から消えて!」

「…分かったよ…」

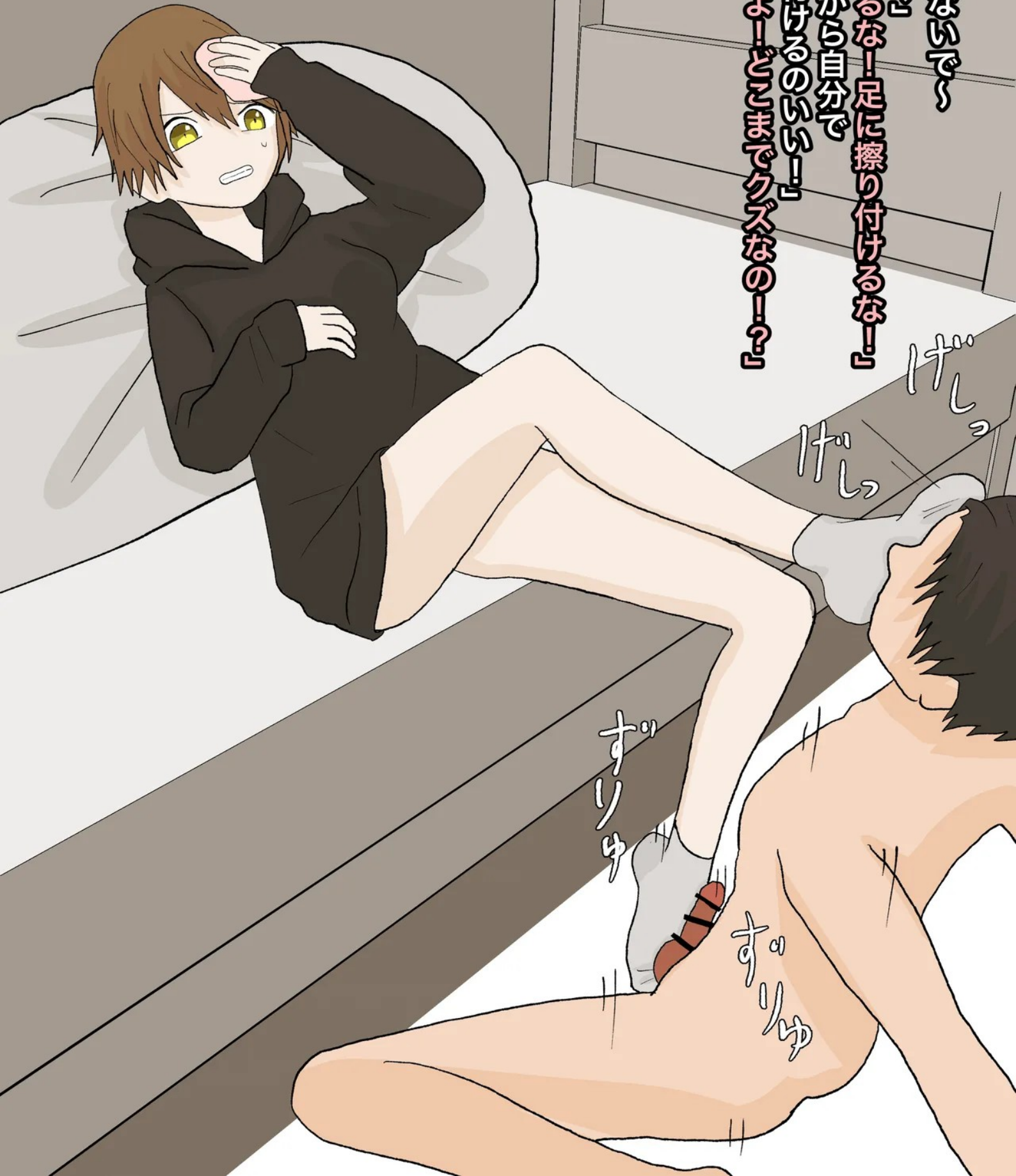
「……ほっほら分かったんなら早く…」

「…にやり…」

げし



「やっぱり、捨てないで、
この通りだから」
「ちよつ腰上下するな！足に擦り付けるな！」
「あつ顔踏まれながら自分で
足にチン」擦り付けるのいい！」
「状況考えなさいよ！どこまでクズなの！？」



「もう我慢できん！顔にかけるのがダメならこれもらっせー！」
「ちよつと！靴下！なんでそうなるの！？」



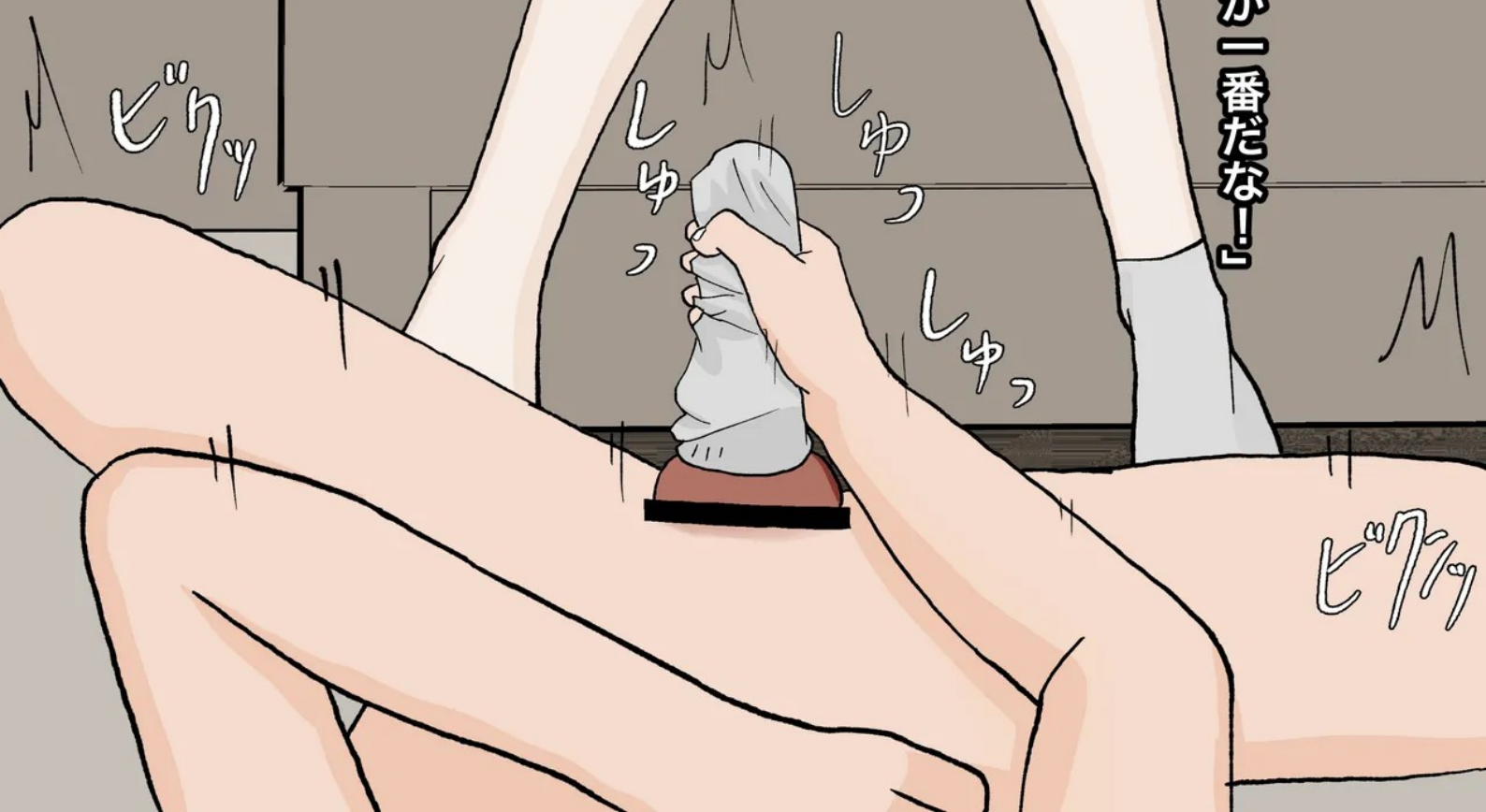
「ああああー！買ったばかりの靴下なのにー！ー！ー！」
「へへっここに中出ししてやるぜー！」

「返してよおおー！」

「はあああー！布生地最高！やっぱり靴下は自分で被せてするのが一番だな！」

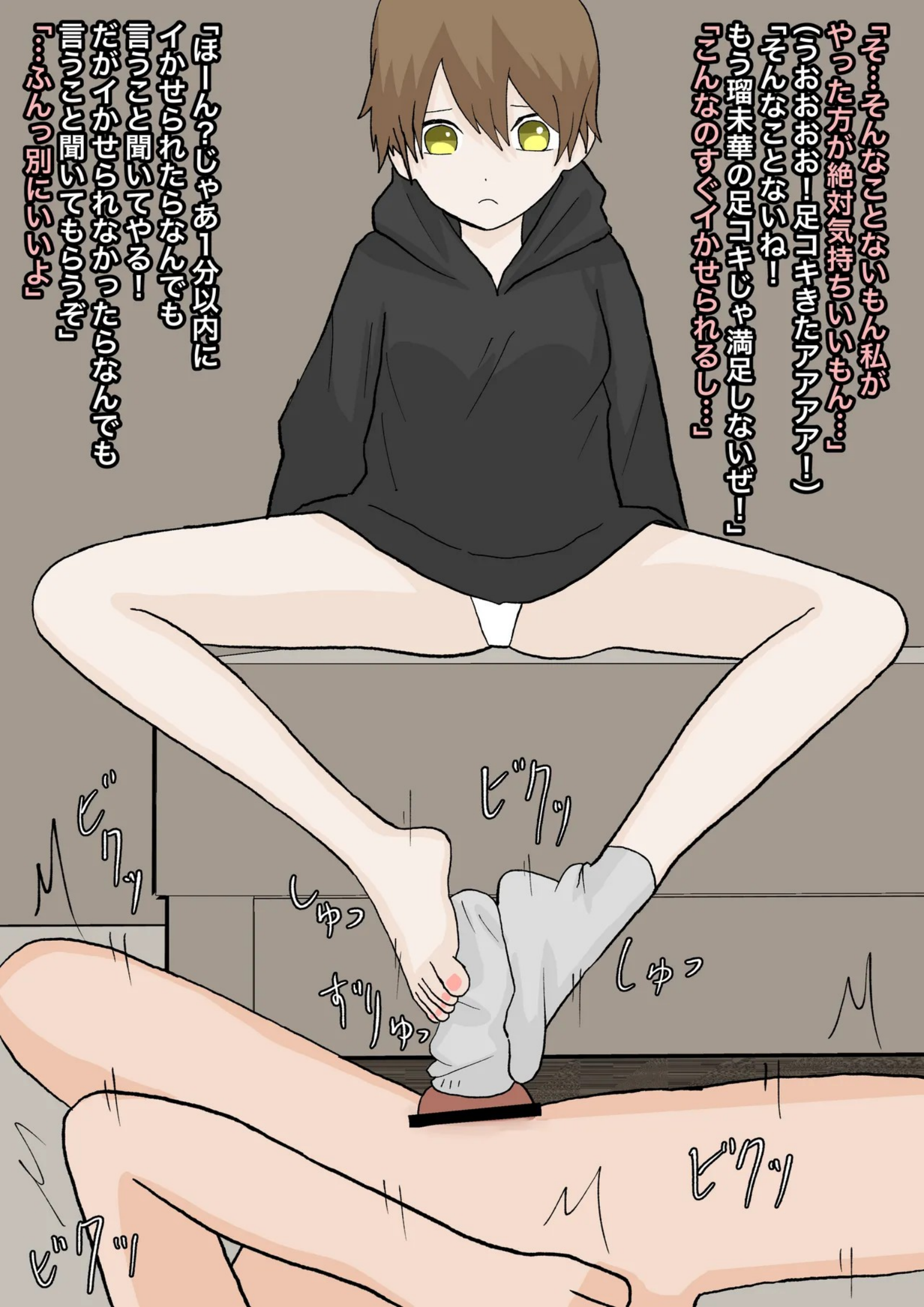


「あーこの前瑠未華の足コキ最高だと思ったけど
やっぱり自分でやった方が気持ちいいなー！」
「えっっっっっっー！ー！」



「そ…そんなことないもん私が
やった方が絶対気持ちいいもん…」
「うおおおお！足」キきたアアアア！
「そんなことないね！
もう瑠末華の足」キじゃ満足しないぜ！
「こんなのすぐイかせられるし…」

「ほーん？じゃあ1分以内に
イかせられたらなんでも
言うこと聞いてやる！
だがイかせられなかったらなんでも
言うこと聞いてもらうぞ」
「…ふんっ別にいいよ」



「えっちょっと待つー!？」
「どうしたの?急に驚いた顔して...」
「いやっその...」



「ちよっ待ってっイグうううう!」
「…30秒も我慢できなかったね」
「いついつの間にこんなに上手く!?!」
「いやっこっちも無理やり
やられまくってるぞ
弱いとこわかってくると言っか…!」

「なんでも言うこと
聞いてくれるんだよね?」
「えっと…その…」

「ははっもう取り消せないよ」
「じゃっこれから射精管理するから」
「じゃ!?!射精管理!?!」

「まあいい子にしてたら1週間に
一回足で抜いてあげるから」
「そっそんなあ…」

「その制欲にまみれた汚い頭教育してやるから覚悟してね」

